

音楽科教育法に必要とされる音楽基礎力育成の一考察

— 小学校教員養成課程における音楽経験の有効性 —

A Consideration of Basic Music Training, which is a Necessary Part of the Teaching of the Subject of Music

— The Effectiveness of Music Experience in the Teacher-training Program for Elementary School Teachers —

次世代教育学部こども発達学科

高崎 展好

TAKASAKI, Nobuyoshi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：教員養成，音楽科教育法，表現，器楽合奏，トーンチャイム

Abstract : The music education methods in the training process for elementary school teachers consist of fifteen lectures and practice sessions in a curriculum comprising of fundamental knowledge, acquisition of practical and technical skills, and the creation of teaching guides. However, in the limited lecture and practice time given, it is extremely difficult for students who do not specialize in music, or have little musical experience to acquire the basic music skills that would enable them to teach the subject. This means that in the future, they will face many challenges when teaching. The objective of this study is to clarify the effectiveness of ensemble-based music experience in developing musical knowledge, basic skills, expressive abilities, and technical skills that are required of elementary school teachers.

Keywords : Teacher Training, Music Education Methods, Expression, Ensemble, Tone Chimes

I 研究目的

小学校教員養成課程における音楽科教育法は，教員養成大学において15回の講義，演習で，音楽の基礎知識，実技，技能の修得，学習指導案作成，模擬授業を行うカリキュラムとなっている。田中（2010）は，音楽科教育法の授業において，その核となるのは学習指導案の作成である¹⁾と述べており，学習指導案を作成するためには，音楽の基礎知識，音楽理論を理解できていることが前提であり，音楽を専攻しない学生や音楽経験の少ない学生にとって，講義，演習の限られた時間で，教科指導に至るまでの音楽基礎力を修得することは非常に困難である。畠澤（2012）は，音楽にコンプレックスのためか授業に臨む学生の姿勢は消極的であり，授業展開に戸惑うことが度々ある²⁾と述べている。将来教員として教科指導にあたる際，課題

が山積みである。

教科教育法の講義，演習では，音楽科教育目標に準じた，音楽の基礎知識の修得，学習指導要領に基づいた，年間指導計画，各学年の発達段階を踏まえた教材の選定と配列，指導内容，題材の評価基準など，指導案作成及び教材研究，授業実践演習を学修する。

音楽科は，学校教育法，第二章，第二十一条 第九項「生活を明るく豊かにする音楽，美術，文芸その他の芸術について基礎的な理解と技能を養うこと。」³⁾とあり，小学校において音楽科の果たすべき第一の役割について金本（2011）は，「子どもたちが生涯にわたって，明るく潤いのある人間生活を送る，その一環として役立つことになるような音楽活動を行うための基礎的な能力を養っておくところにあるといえる。また併せて，このような能力を培うために，楽しく，しかも主体的・創造的に音楽活動を行うことを通して，

例えば美しいものを求めようとする創造の喜び、これまで多くの人々が大事に育み伝えてきた音楽を心から受容しようとする気持ちや姿勢を育てるようにすることなど、大事な役割を音楽科が多く担っていることを十分に認識しておく必要がある⁴⁾と述べている。

音楽科の指導は、知識や技能の習得を目標とする技能教科⁵⁾と呼ばれ、幼少よりピアノや楽器を習得してきた者、また学校の部活動等で管楽器や打楽器、弦楽器、声楽等を経験してきた者でなければ、教員として教科指導にあたる際、音楽科教育目標を達成することは非常に困難なことである。

小学校学習指導要領解説、音楽科教科目標に「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」⁶⁾とある。これは小学校教育における音楽科が担うべき役割とその目指すところを総括して示したものである。

教科目標を指導者として児童に達成させるためには、指導者自身が様々な音楽体験、音楽経験を通して、音楽を愛好する心情と基礎的な音楽能力を培わなければならない。教員養成課程において、様々な音楽活動を通して、活動そのものを楽しんだり、音楽に感動したりする経験を積み重ねることが必要であると考える。

指導者自身が継続的に音楽に興味、関心を持ち、自らが音楽の楽しさや面白さ、素晴らしさに気付き、音楽活動への興味、関心を膨らませることが重要である。

本研究の目的は、音楽科教育法修得に必要な音楽基礎力の育成及び、将来小学校教員を目指す学生に必要とされる音楽の知識、表現力、技能を育成するため、器楽合奏を通じた音楽経験の有効性を明らかにすることである。

II 研究方法

本研究では、岡山県私立K大学教育学部ゼミナール受講生3、4年生13名を対象に1コマ90分、15回の授業において、トーンチャイムを使用した器楽合奏を中心に音楽基礎力育成及び、合奏を通じた音楽経験から、音楽に対する豊かな感性と音楽を愛好する心情を養うことができるのかを考察する。

器楽合奏から学べることについて、受講生には全15回授業終了後に質問紙調査を行い、分析、考察する。

II-1 受講学生の音楽経験に関する実態調査

初回授業でゼミナール受講生に対して、音楽経験に関する質問紙調査を実施した。

次の4項目が音楽経験に関する質問紙調査内容である。

- ①音楽教室等でのピアノ学習の有無
- ②読譜力の有無
- ③トーンチャイム経験の有無
- ④ピアノ以外の楽器経験の有無

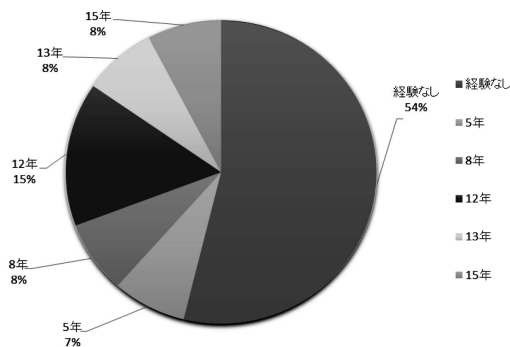
質問紙調査の結果は次の通りである。

調査対象の学生13名中、13名回答。質問紙調査回収率は100%。本調査からは以下の結果が得られた。

ピアノを習っていたと回答した学生の経験年数は5年7.69%、8年7.69%、12年15.3%、13年7.69%、15年7.69%である。また、継続して現在もピアノを習っている学生は0%であった(表1)。

音楽経験に関する質問紙調査結果(表1)

質問事項	回答(%)
音楽教室等でのピアノを習っていた	46.1
楽譜を無理なくスムーズに読むことができる	15.3
トーンチャイムを演奏したことがある	7.6
ピアノ以外の楽器経験がある(教育楽器を除く)	30.7



ピアノ経験年数グラフ(図1)

ピアノ経験者46.1%に対して、楽譜を無理なくスムーズに読むことができると回答したのは15.3%と少数であった。84.6%の学生は読譜に何らかのストレスを感じ苦勞すると回答。特に階名やリズム(音価)を読むことが困難であると回答した。その他に調号や臨時記号、音楽記号が理解できていないと回答した。

トーンチャイムを経験した学生は高等学校の音楽科授業で体験したと回答。その他の92.3%の学生は、本研究で初めて手にする楽器と回答した。

トーンチャイムを演奏する前の印象についての自由

記述回答は次の通りである。

トーンチャイムを演奏する前の印象についての自由記述 (表2)

自由記述	回答 (%)
楽しそう	69.2
音の数の多さに驚いた	46.1
低音の大きさと重量に驚いた	30.7
難しそう	23
面白そう	23
きれいな音	15.3
ハンドベルに似ている	7.6
人カオルゴール	7.6

30.7%の学生がピアノ以外の楽器経験があると回答。中学校、高等学校で吹奏楽部に所属し、管楽器、打楽器の経験がある。楽譜を無理なくスムーズに読むことができると回答したのは、吹奏楽経験者の15.3%であり、現在も楽器を継続している。

音楽経験に関する学生の実態調査から、約半数の学生が音楽経験者ではあるが、ピアノを習っていたが継続しておらず、楽譜に触れる機会がなくなり読譜能力が落ちていることがわかる。吹奏楽経験者は、クラブ活動で継続的に楽譜に触れているため、読譜に苦労しないと回答している。この結果から、過半数の学生は、読譜を苦手とし、楽譜を見て演奏することに苦労することがわかった。

II-2 使用楽器

本研究での器楽合奏は、教育用楽器メーカー鈴木楽器製作所が開発したトーンチャイム (TONE CHIME) を使用する。元はハンドベルメーカーであるマルマーク社がハンドベルよりも安価なクワイヤチャイムを考案し、これがトーンチャイムの原型となった。

形状はアルミニウム製のチューブにクラッパーと呼ばれるゴムのハンマーが取り付けられており、そのクラッパーを棒状の筒に振り当てることで柔らかく澄んだ美しい音色を奏でることができる。トーンチャイムは、一人ひとりがそれぞれの音を受け持ち、グループで一つの音楽を奏で創りあげるため、少人数から奏者の数に応じて使用するチャイムの音数を選ぶことができる。

トーンチャイムの一つひとつの音の重なりやハーモニーから感性や協調性を育み、器楽合奏の楽しさや素晴らしさを体感することができ、音楽性を養うこともできると考える。

奏者の人数に合わせて、使用する音域を最大56本 (4オクターブ1/2) まで増やすことができるため、旋律を演奏する以外にピアノのように和音や伴奏も奏でることができるため、音楽初心者から上級者まで幅広く活用でき、近年、演奏愛好家をはじめ、学校教育や養護施設、音楽療法など、幅広く活用され注目されている。

本研究では、最大音域4オクターブ1/2 (56音) を13名で使用する。各音は本体の長さが異なり、高音になるほど短く、低音になるほど長く、重たくなるため低音は両手で持って演奏する。

各音には、英語音名の表記があり、本体五線譜表記は実音よりも1オクターブ低い表記となっている。これは実音通りの五線譜表記では読みづらくなるため、最も読みやすい位置に合わせたもので五線譜の表記において、よく用いられる方法である。演奏は、奏者1名につき2本~6本を担当する。4オクターブ1/2での演奏の場合、12名~16名が理想的であると考えられる。

SUZUKI トーンチャイム

計4セット4オクターブ1/2 (56音) 使用。



HB-250 (基本25音) G4~G6 (図3)⁷⁾



HB-120A (12音) C4~F4# / G4b・G6# / A6b~C7 (図4)⁷⁾

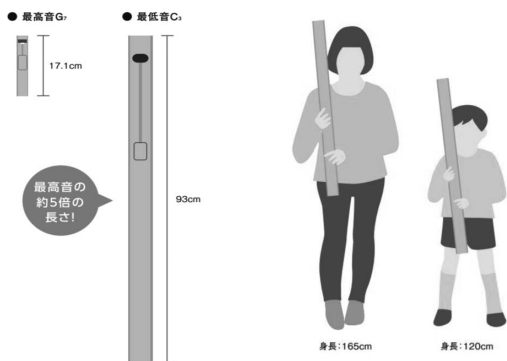


HB-120B (12音) G3~B3・C7# / D7b~G7 (図5)⁷⁾



HB-7C (低音7音) C3~F3#/G3b (図6)⁷⁾

図3, 4, 5, 6でもわかるように、同じサイズの楽器はなく、高音と低音はサイズが異なり、最高音であるG7のサイズは17.1cm, 0.12kg, 最低音C3のサイズは93cm, 1.62kgあり、奏法にも工夫が必要である。



トーンチャイムの最高音と最低音の大きさ比較と縮尺 (図7)⁷⁾

II-3 トーンチャイム演奏に必要な用具

楽器を並べるための長机4脚, 楽器保護のための卓上スポンジ, 譜面台13台, 楽器保護のための白手袋, 楽器保護のための机上フェルト2000mm×900mm4枚

II-4 選曲・楽譜

トーンチャイム用の楽譜は、ハンドベルほど歴史がないため、全音域56本(4オクターブ1/2)を使用する楽譜は、まだ多く販売されていない。

アンケート調査を実施し、演奏したい曲、取り組みやすい曲、発表する際に老若男女楽しむことができる楽曲をテーマに選曲を行う。

ここで使用する楽譜は13名の奏者のためにトーンチャイム用に編曲したオリジナルの楽譜である。

楽譜に関しては、筆者と編曲を希望する学生が制作を行った。制作譜は、添付資料として次の頁に掲載する。

アンケートから選曲された楽曲一覧

- ①生命の奇跡
- ②大きな古時計
- ③アンパンマンのマーチ
- ④赤いスイトピー

⑤人生のメリーゴーランド (学生編曲)

⑥パート・オブ・ユア・ワールド (学生編曲)

演奏してみたい楽曲が学生から多数候補に上げられ、ディズニー、ジブリ、こどもの歌、大人が聴きたい名曲、トーンチャイムの音に合っている曲など演奏するだけでなく、プログラム全体のバランスを考慮し研究発表することを前提とした選曲となった。

II-5 練習方法

楽曲で使用するトーンチャイムの分配を決める作業をベル割り⁸⁾と言うが、この作業が最重要と言っても過言ではない。適切なベル割りは演奏を容易にし、奏者を楽しませてくれる。しかし、この作業を怠ると、奏者を混乱させ、演奏を不可能なものにしてしまうこともある。奏法に無理のないよう振り分けることが、楽しく演奏する上で重要なことである。

次に、パート譜の配分を決めるが、各パートの難易度を平均化させることは不可能なため、難易度の基準はリズムで判断する。音楽未経験者は、低音パートの伴奏和音の容易なリズムを経験するとよい。ミスしても目立ちにくいいため、混乱を起こすことを避けることができる。並び方は原則として、鍵盤楽器と同様に低音を担当する人が左、右に向って高音になるように配置する。ベル割りによっては低音と高音を担当することもあるため、その限りではない。

ベル割り、パート譜の配分を決定後、自身のパート譜に担当する音に蛍光マーカーで音符に色付けをする。ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シの各音を7色の蛍光マーカーを使用し、担当する音に色を付ける。この際、音と色に定義付けを行うことが重要である。

楽曲によって、受け持つ音(パート)が変更になっても、音を色で判断できるようにするためである。また色付けをすることで音の見落としや振り忘れの防止にもなる。色付けの定義は例えば、「ドレミの歌」をテーマに「ド」は、ドーナツの「茶色」、「レ」は、レモンの「緑色」、「ミ」は、みんなの「桃色」、「ファ」は、ファイトの「橙色」、「ソ」は、青い空の「青色」、「ラ」ラップの「黄色」、「シ」幸せの「紫色」のように定義付けをすることで、担当する音が替わっても、音を色で判断することができる。

次に、発音と奏法の練習を行う。良い音を出すためには、どのような工夫が必要か試して考える。また、強い音、弱い音、きつい音、優しい音、チャイムは振り方次第で様々な音色を奏で、表現できることを体験し、奏法を身に付けることができる。練習は、ゼ

ミナール90分×15回で実施。個人練習と合奏練習を行う。目標として発表日を設定し計画的に練習を行う。

生命の奇跡

高崎展好編曲

13名の奏者のためのトーンチャイム譜 (図8)

大きな古時計

ワーク作曲
高崎展好編曲

13名の奏者のためのトーンチャイム譜 (図9)

アンパンマンのマーチ

三木たかし作曲
高崎展好 編曲

♩ = 96

2 アンパンマンのマーチ

13名の奏者のためのトーンチャイム譜 (図10)

赤いスイトピー

作曲 呉田軽穂
編曲 高崎展好

♩ = 84

2 赤いスイトピー

13名の奏者のためのトーンチャイム譜 (図11)

13名の奏者のためのトーンチャイム譜（図11）

II-6 音楽基礎力育成のための考察

①楽譜に慣れ親しむ

楽譜に記されている、音符、休符、記号、音楽に関わる用語を理解しながら演奏する。楽器を演奏し、合奏を行う上で、楽譜を読むことは最低限必要な力である。楽譜を目で追いながら、楽譜に記された記号や用語を理解し、器楽の演奏を通じて、楽譜を見て演奏する力を身に付け慣れ親しむ。

②音に責任を持つ

各パートが異なる楽器を担当するため、一人ひとりの責任が明らかとなる。集団の中での役割を自覚し、担当する音、演奏に責任を持つ。

③協同で音楽をつくる

合奏は、他の楽器と協同して音楽を創り上げていくため、1つのパートが欠けても演奏にならないという点において、連帯感や協調性を育み、人間としての成長を図ることが期待できる。また、協同で音楽を創り上げる喜びを体感する。

④生涯にわたって

楽器を用いて演奏することの楽しさを体験し、楽器を用いて、自分の思いや意図を表現することの喜びや感動することを味わう。

⑤楽器を指導する際の留意点

楽器の持ち方や奏法は、その楽器の最も良い音を出すためのものではあるが、ここでは奏法の習得が学習の目的ではない。それぞれが自主的に希望する楽器を選択し、その楽器に合った最良の奏法を工夫

し、創造力を働かせ表現することの楽しさや、演奏することへの興味、関心を促す。

楽曲の曲想を感じ取り、楽曲に合った表現を工夫することで感性を育て、音楽活動の基礎的な能力を高めるよう配慮が必要である。

III 研究発表

学内において、研究発表としてトーンチャイム・コンサートを以下の要項にて実施。

日時：2016年12月22日（木）18時30分開演

場所：学内Hホール

対象：学生、教職員、地域住民

目的：発表を行うことで音に関心を持ち、音楽を楽しむ音楽の素晴らしさや感動を共有する。発表を設定することで目標意識を持ち、計画的な練習及び音楽経験を積むことで、協調性を育み音楽基礎力を育成する。また、音楽科教育目標である、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

運営：企画、運営は学生主体で行う。選曲、プログラム制作、案内チラシ制作、会場設定、会場準備、司会原稿作成、受付、誘導等を行う。

プログラム

第1部

- ①クリスマス・メドレー
- ②赤鼻のトナカイ
- ③サンタが街にやってくる
- ④生命の奇跡

第2部

- ⑤キラキラ星に願いを
- ⑥大きな古時計
- ⑦パート・オブ・ユア・ワールド※
- ⑧人生のメリーゴーランド※
- ⑨赤いスイトピー
- ⑩ムーンライト伝説※
- ⑪アンパンマンのマーチ

※編曲、楽譜制作に関して、プログラム⑦⑩は学生S、⑧は学生N、その他は筆者によるもの。



トーンチャイム研究発表コンサート（図12）

IV 研究の結果と考察

小学校教員に必要とされる音楽の知識、基礎力、表現力、技能を育成するためのトーンチャイムを使用した器楽合奏を行った結果、以下の質問紙調査結果から学生に変容が見られた。

ゼミナール15回の授業、研究発表後にトーンチャイムに関する質問紙調査を実施。

次の8項目が質問紙調査の内容である。

- ①楽譜に慣れ親しむことができた
- ②自身の音に責任を持つことができた
- ③協同で音楽を作る良さを感じることができた
- ④演奏することの楽しさを感じることができた
- ⑤共に教え合うことはできた
- ⑥積極的な参加の有無
- ⑦楽器や楽譜に対する意識の変化
- ⑧トーンチャイムから学んだこと

質問紙調査の結果は次の通りである。

調査対象の学生13名中、13名回答。質問紙調査回収率は100%。本調査からは以下の結果が得られた。

トーンチャイムに関する質問紙調査結果（表3）

質問事項	回答 (%)
①楽譜に慣れ親しむことができた	84.6
②自身の音に責任を持つことができた	100
③協同で音楽を創る良さを感じることができた	100
④演奏することの楽しさを感じることができた	100
⑤共に教え合うことはできた	100
⑥積極的な参加の有無	76.9
⑦楽器や楽譜に対する意識の変化（以下自由回答）	84.6
・演奏することの不安や恐怖感の軽減	72.7
・楽譜を演奏しながら目で追えるようになった	63.6
・リズムを理解して演奏できるようになった	63.6
・更に様々な楽曲に取り組んでみたい	63.6
・トーンチャイムの音色が好きになった	54.5
・楽譜への抵抗感が軽減された	36.4

⑧トーンチャイムから学んだこと（自由回答）	
・音、ハーモニーの美しさ	92.3
・達成感が味わえた	76.9
・奏でることの楽しさ	53.8
・合奏することの楽しさ	53.8
・拍子を数えながらリズムを読み演奏すること	46.1
・協調性	46.1
・奏でることの喜び	38.4
・音楽を創る楽しさ	38.4
・楽譜を読むこと	30.7
・演奏を聴いている人の笑顔	23.0
・発表することの楽しさ	7.7

本研究から、84.6%の学生が楽譜に慣れ親しむことができ、また参加した全員が自身の奏でる音に責任を持ち、音楽を創り上げる良さや楽しさを感じることができたと回答した。また練習や合奏の際、共に助け合い、教え合う姿も多く見受けられ、奏でる楽しさ、教えることの面白さや難しさを体感し修得できた。

初回授業で楽譜を読むことに苦勞すると回答した学生84.6%の全員がトーンチャイムを使用した音楽経験を積むことで、自身の奏でる音に責任を持ち、楽譜を目で追いながら演奏、表現できるようになった。また、積極的な練習への参加も見られ、楽器や楽譜に対する意識の変化も見られた。

72.7%が演奏することの不安や恐怖感の軽減があったと回答。これは楽譜を理解し、音符やリズムを正確に読み、奏でる自信が身に付いた結果と考えられる。

他者と音を合わせることの難しさや楽しさを知り、音楽を豊かに表現する力を身に付けることができたと同時に、楽譜に記された、強弱記号や表情記号を理解し、表現豊かに、楽曲を創りあげる素晴らしさを経験することができた。

参加した学生の92.3%は、これまでの学校教育の中で、トーンチャイムに触れる機会がなかったため、楽器に対する先入観がなく、トーンチャイムを演奏する前の印象についても、初めて手にする楽器ということもあり、楽しそう、面白そうといった回答が多く、楽器に対する興味、関心が強かったことも大きく作用しているものと考えられる。トーンチャイムは誰でもどこでも簡単に演奏できることから、音楽経験の少ない学生にとっては扱いやすく、その優しく美しい音色は、非常に親しみやすいと考えられる。

トーンチャイムから学んだことの自由回答に92.3%の学生が、その音の美しさや重なり合った際の響きの美しさに感動を覚えたと回答。また13名で心と呼吸を

揃えて奏でることの楽しさや喜びを感じ、楽譜を読んで演奏するだけでなく、1つのパートが欠けても演奏にならないという点で連帯感や協調性を育み、人間として成長できたことが調査結果からも窺える。

本研究でトーンチャイムを選んだ理由は、誰でもどこでも簡単に演奏が可能である点であるが、本研究の考察からトーンチャイムは音楽の基礎を身に付けるのに最も適していることが分かった。

トーンチャイムは、音楽に合わせて左右の腕を振るリズム運動である。演奏においては、音を奏でてはいるがリズム的要素が強く、音楽に合わせて担当する音をリズムと身体で覚えるため打楽器の要素が強い。演奏しているというよりはリトミックを行っているのと同じ効果があることが分かった。

これは、スイスの作曲家、音楽教育家である、エミール・ジャック＝ダルクローズによって考案された音楽教育法である。ダルクローズ理論⁹⁾は、リズムが音楽の最も重要な要素であり、「動きを通じて音楽の諸概念を教える」という理論である。動作で音楽の概念を表現することによって、音楽表現に関する一貫した自然な感覚を得るのである。身体そのものをよく調律された楽器へと変えることが、確かに鮮やかな音楽の基礎を身につけるのに最も適している。

本研究において音楽基礎力育成のためトーンチャイムを使った器楽合奏は、音楽の知識、基礎力、表現力、技能修得に相応しい楽器であると同時に、その美しい音色から音楽に対する豊かな感性や音楽を愛好する心情を養うことができる楽器であると考えられる。

この音楽基礎力育成が音楽科教育法の修得をスムーズなものにする。将来教員として教科指導にあたる際、教科目標を指導者として児童に達成させるためには、様々な音楽活動や音楽経験から指導者自身が音楽を愛好する心情を持ち、自らが音楽の良さや面白さ、美しさに気づき、音楽活動への興味、関心を膨らませることができる。

本研究の結果から、小学校教員に必要とされる音楽の知識、基礎力、表現力、技能を育成するための器楽合奏を通した音楽経験は有効であることが明らかとなった。

技能教科である音楽は机上の学習、理論だけでは、音楽の技能を身に付けることは不可能である。様々な音楽経験こそが、やがて教育現場に出た際に生かされ、創造力を働かせ、様々な音楽活動や学習指導に活用、応用できると考える。

引用文献

- 1) 田中龍三 (2010), 音楽科教育法における模擬授業, 教科教育学論集2010, p15.
- 2) 畠澤郎 (2012), わが国における音楽教育の課題, 椋山女学園大学教育学部紀要, 5, p244.
- 3) 学校教育法 (1947), 昭和22年3月31日, 法律第26号.
- 4) 金本正武 (2011), 教員養成課程 小学校音楽科教育法, 教育芸術社, p7.
- 5) 森下一期 (1993), 現代学校教育大事典, v2, p114-p115.
- 6) 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説 [音楽編], 平成20年8月, p5.
- 7) 鈴木楽器製作所 (2016), スズキ教育用楽器総合カタログ, p99-p110.
- 8) 菅野真子 (2013), 新訂トーンチャイム入門, 生涯学習音楽指導協会, p18.
- 9) L. チョクシー/R. エイブラムソン/A. ガレスピー/D. ウッズ (1994), 共著, 板野和彦訳, 音楽教育メソッドの比較 コダーイ, ダルクローズ, オルフ, C・M, 音楽之友社, p53-p111.

参考文献

- 畠澤郎 (2015), 小学校教員養成課程用 新・音楽科教育法, 朝日出版社.
- 最新 初等科音楽教育法 [改訂版] 小学校教員養成課程用 (2011), 音楽之友社.
- 森保尚美 (2015), 「初等音楽科教育法」における学習指導案作成に関する研究, 広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要, 創刊号, p47-p57.
- 桂博章, 鈴木敏郎 (1992), 音楽科の教育内容と方法について, 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門, 43, p1-p13.
- 大石由紀子 (編曲) 大石光男 (監修) (2014), 改訂新版トーンチャイムのためのクラシック名曲集①, サーベル社.
- 大石由紀子 (編曲) 大石光男 (監修) (2013), トーンチャイム小曲集 初級編, サーベル社.